

はじめに

「名護・やんばる」地域は自然環境や歴史文化など沖縄独自の魅力を色濃く残す地域であり、その地域資源は観光立県沖縄の財産ともなっています。

その一方で、こうした観光資源は生活様式の変化や社会資本の整備、生活圏の広域化のなかで失われつつあり、また観光利用による資源の荒廃が進むことなども懸念されています。このため、「名護・やんばる」地域の自然・歴史文化を適切に保存・継承し持続可能な利用を模索する必要があります。

沖縄の観光産業に関しては、近年、観光客の増加が顕著に進んでいます。とりわけ外国人観光客は短期間に急増し、さらに増加を続けています。また国内客はリピーター化が進み、8割がリピーターとなっています。

外国人観光客は旅先における地域独自の自然や文化の魅力を求めており、国内のリピーター客は来訪回数が増えるにしたがい地域の奥深い魅力を求める傾向にあります。これらのことから、「名護・やんばる」の特徴的な自然や文化は今後の沖縄観光の大きな強みとなり、さらに来訪者が増加していくことが予想されます。

観光客の増加により地域資源が多くの人目にふれる一方で、その価値が十分に伝わらないまま利活用が進むことにより、環境への影響や安全面の問題、地域住民との摩擦なども生じてきています。

こうした背景を受け、「名護・やんばる」の中核都市であり玄関口に位置する名護市において、「名護・やんばる」地域全体の自然や歴史・文化を保存・継承するだけでなく、観光客にもその価値を正しく伝え、地域資源とのふれあいや体験、利用にあたってのルール、安全面での配慮事項などを発信する総合的なガイダンスを行うことが今後不可欠となります。同時に、地域資源の価値についてこれまで以上に地元住民の理解を得ることも重要であり、地域活動のネットワークづくりにより交流を円滑に進める拠点の必要性が高まっています。こうした取組は地域資源の持続可能な利用へとつながり、観光資源として地域の魅力を高めることにも寄与します。

「名護・やんばる」とは

「やんばる」と聞いて、沖縄本島北部の山や森林など豊かな自然が多く残された地域を思い浮かべる人は多いと思います。

名護市を含む旧国頭郡は、中生代以前に形成された岩石を基盤とする山々が連なっており、中南部に比べて高い山や溪谷、河川が発達し、豊かなイタジイ（オキナワジイ）の森林に覆われています。そのため、琉球石灰岩を基盤とする中南部と比べると、北部で見られる地形や動植物などの自然的特徴はかなり異なります。また、古くは14～15世紀の三山時代にほぼ同じ範囲を北山が統治し、それ以降、行政的にも中南部と区分されてきました。このような背景の中で、やんばるでは、自然との関わりも含めて、独自の歴史、伝統、生活文化が育まれてきました。

こうした理由から、恩納村・金武町以北の本島北部（旧国頭郡）と伊是名島・伊平屋島を含めた12市町村をまとめて「やんばる」と呼ぶのが一般的で、沖縄県が策定した「沖縄21世紀ビジョン基本計画」においても、この区域を北部圏域として他と明確に区別しています。しかし、自然や歴史・文化的特徴という意味で、奄美大島に至るまでの島々とも関係が深く、類似点も多く見られます。また、本島北部の中でも古くから中核的な都市機能を持つ名護市を強調して「名護・やんばる」と呼ぶ場合もあります。

本計画においては、これらの多角的なやんばるの捉え方をふまえて、事業域を「名護・やんばる」として表現し、名護からやんばる全体を視野においた事業の展開をめざします。



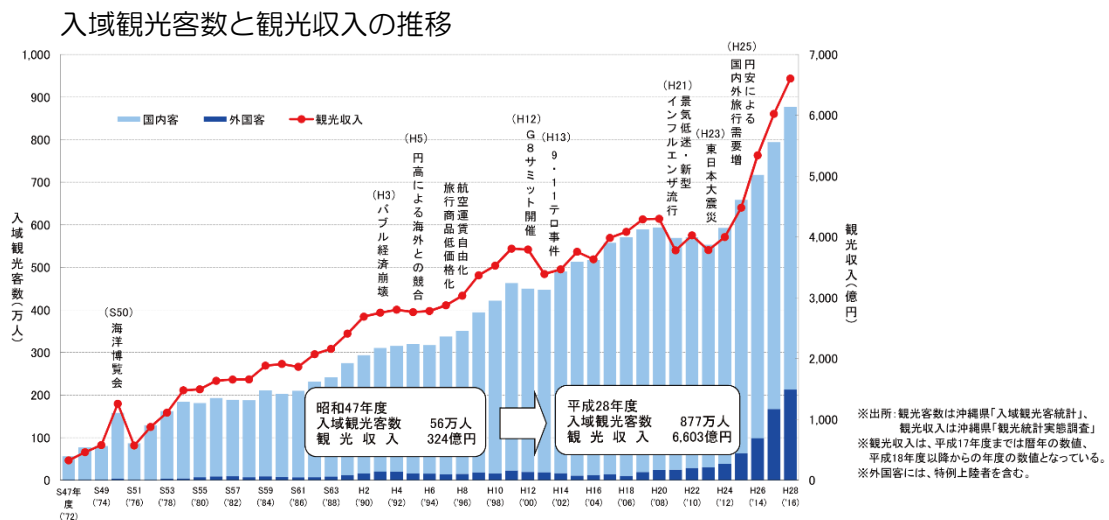
I 全体計画

1. 地域の現状と課題

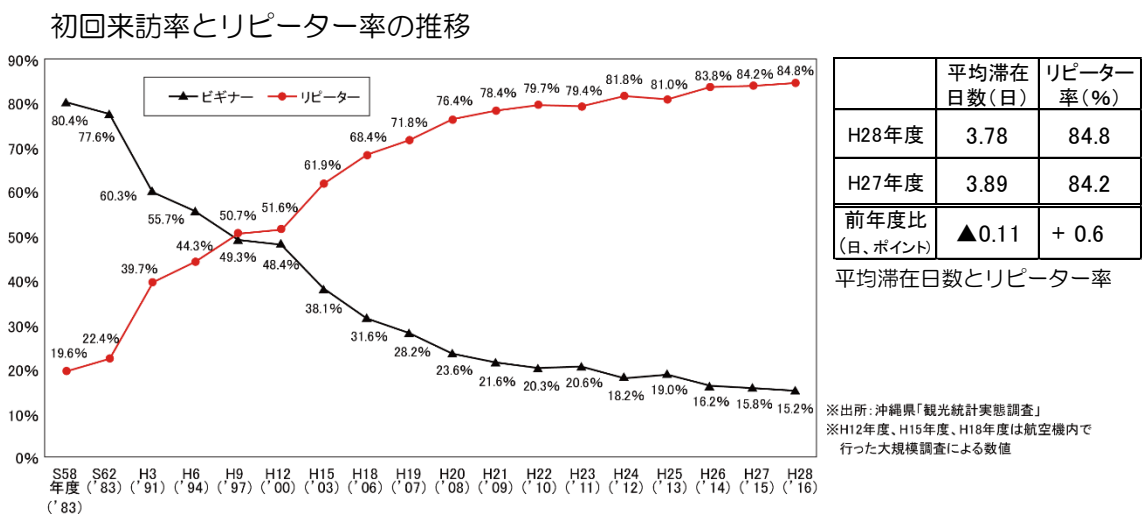
(1) 外国人観光客の来訪と国内客のリピート来訪が急増しています。

情報拡散の量的・速度的進化と個人の観光案内ブログなどの増加により、日本への興味関心が単なる外国訪問レベルを越え、独自の自然や歴史、文化を求める傾向を見せています。また国内客リピーターは、来訪回数を重ねるたびに地域のより奥深い魅力を求める傾向が強まっています。

沖縄地域の中でも特に豊かな自然・歴史・文化をもちつつ、主要ゲートウェイからのアクセスもよい「名護・やんばる」の地域資産は、これらの傾向に鑑み今後の沖縄観光の強みとなることを示しており、地域資産の価値をさらに高めることが、次代を見据えた沖縄の魅力発信のカギとなることを示しています。



(2) 「名護・やんばる」の地域資産を活用した取組が活性化しています。



I 全体計画

国内でも随一の独自性と多様性を持つ自然や文化の活用をはじめ、観光客誘致への積極的な取り組みが進められており、空港を拠点とする中南部地域から北部地域へのさらなる観光流入増が予測されるなか、観光客の分散化や広域周遊促進の拠点として、「名護・やんばる」の多様な観光資源の活用が期待されています。

① やんばる国立公園世界自然遺産登録に向けた取組

沖縄県北部の国頭村、大宜味村、東村にまたがる「やんばるの森」が、2016（平成28）年9月に「やんばる国立公園」に指定され、日本有数の自然をもつ地域としての評価が高まっています。また、やんばるの森の一部は世界自然遺産登録候補ともなっており、近い将来の登録審査が目指されています。これを機に、沖縄県の試算では、3村（国頭村、大宜味村、東村）の観光客は114万人から169万人（2021年）に増加すると予測されています。



出典：沖縄県 HP (<http://www.pref.okinawa.jp/>)

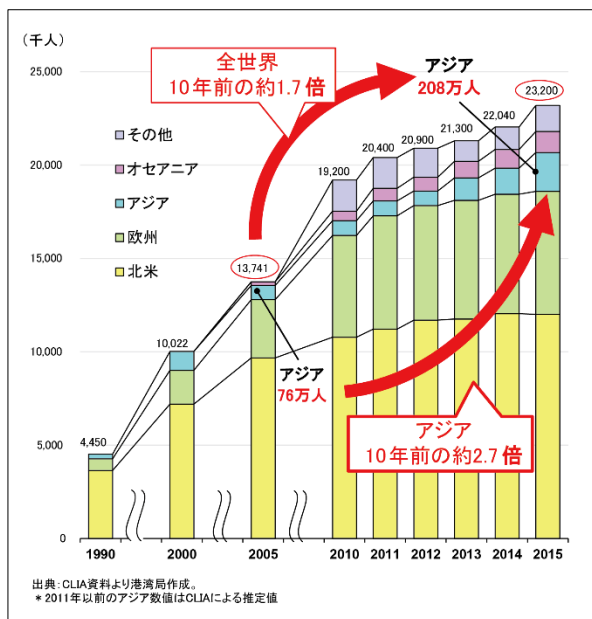
I 全体計画

② 本部港クルーズ船誘致の取組

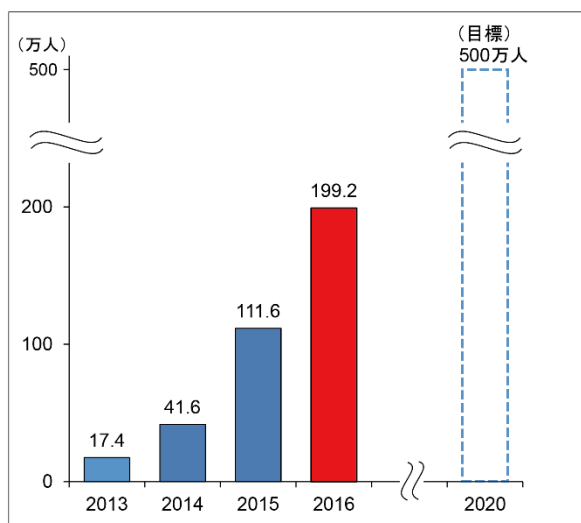
近年、関心が高まっているクルーズでは、一隻で数千人の観光客誘致が可能なため、巨大クルーズ船が入港できる港の整備は世界的な潮流となっており、日本でも各地で取組が進められています。

国土交通省のクルーズ振興にもとづき、本部港は「官民連携による国際クルーズ拠点」を形成する港湾に選定され、2020年の運用開始で寄港88回をめざす、20万トン級客船の寄港が可能なクルーズバス整備にむけて取り組まれています。

世界のクルーズ人口の推移



訪日クルーズ旅客数の推移



注1) 法務省入国管理局の集計による外国人入国者数で概数(乗員除く)。
注2) 1回のクルーズで複数の港に寄港するクルーズ船の外国人旅客についても、(各港で重複して計上するのではなく)1人の入国として計上している。

出典：「国土交通省におけるクルーズ振興の取組について」(国土交通省港湾局産業港湾課)

I 全体計画

③ 海洋博公園のさらなる活性化の取組

2017（平成 29）年 3 月の海洋博公園基本計画においては、「沖縄の太陽、海、花、文化を感じ、体験する場づくり」「アジア・太平洋地域をリードする公園づくり」などをめざし、沖縄文化・センターゾーン、オーシャニックゾーン、熱帯亜熱帯環境ゾーンの 3 つのゾーニングでのさらなる活性化が図られており、2030 年度の公園利用者数を約 800 万人と想定しています。



出典：平成 29 年 3 月「海洋博公園基本計画」（内閣府沖縄総合事務局）

I 全体計画

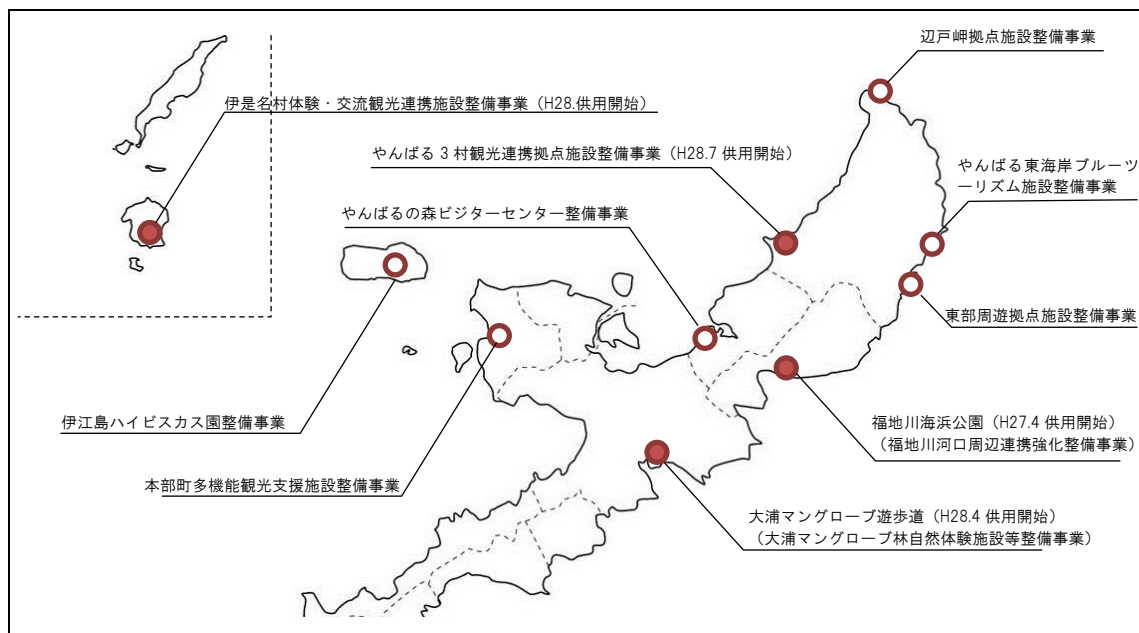
④ 北部振興事業における拠点整備

北部地域では、県土の均衡ある発展を図る観点から 2000（平成 12）年度より北部振興事業（内閣府における沖縄振興策）によりさまざまな事業が実施されています。

2004（平成 24）年度以降は、北部地域における連携促進と自立的発展の条件整備として、産業の振興や定住条件の整備などに資する振興事業（非公共・公共）が進められています。このうち、「沖縄北部連携促進特別振興事業（非公共）」では、北部地域各地に自然・文化体験や情報発信を目的とした拠点整備も図られています。

名護・やんばるの自然と文化拠点施設では、地域の自然や歴史・文化を適切に継承・研究する信頼ある情報源となって、こうした拠点整備と連携することにより相乗効果を発揮します。関連する拠点整備は以下の通りとなっています。

関連拠点施設整備状況（平成 24 年度以降の北部振興事業による実施及び計画）



凡例 ● 供用開始済 ○ 供用未開始

出典：「北部振興事業の実施について」（内閣府沖縄担当部局）をもとに作成

I 全体計画

(3) 地域資源の利活用にもとなう課題とその解決への取組が必要となっています。

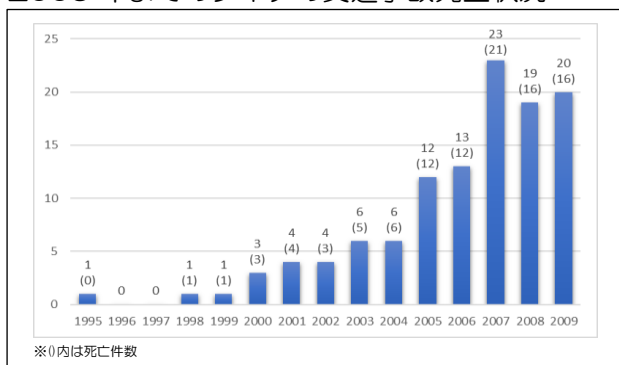
観光客の増加にともない生じる地域への負荷は、どの観光地においても課題となっています。「名護・やんばる」でも、この問題はすでに生じており、地域資源の保全を図った上で持続的な利活用を行い、地域のさらなる振興へつなげていくことが今後ますます求められます。そのためには、観光客に地域資源の価値を正しく伝えて、利用の心得やルールを周知する方策を想定することが重要です。

① 地域固有の財産としての自然の重要性の周知

道路網の整備と活用にともない、車両に動物がひかれて死ぬ轢死や、車両にぶつかって死ぬ衝突死、道路脇排水溝内に落ち込みおぼれて死ぬ溺死、乾燥して死ぬ乾涸死など、ロードキルが多発しています。「名護・やんばる」では、ヤンバルクイナ、ケナガネズミ、リュウキュウヤマガメ、イボイモリなど、国内でその場所にしか見られない固有種や天然記念物をはじめとする多くの動物でこの被害が見られます。この問題に対応するため、観光客への呼びかけや横断幕の設置、普及啓発活動、ケガをした生物の保護・治療などがおこなわれています。また、自然の利活用や物流の増進にともない、外来種の侵入による地域生態系の破壊も大きな問題となっています。こうした課題の解決には、地域固有の自然や外来種の問題について地元住民、観光客の双方が正しい知識を持つことが不可欠です。

こうした問題の重要性について、関係機関とより一層連携を密にして情報発信の機会を量的、質的に増加させる必要があります。

2009 年までのクイナの交通事故発生状況



ロードキルへの対策

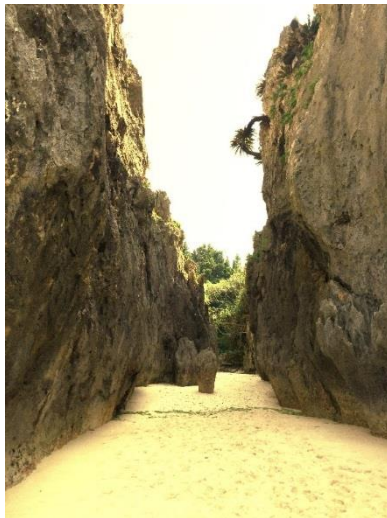


出典：やんばる野生生物保護センターHP (<http://www.ufugi-yambaru.com/>)

I 全体計画

② 観光スポットが有する地域に根ざした文化、歴史的背景の意味や利用心得の伝達

たとえば、もともと地域の聖地であるワルミ（本部町）が、そそり立つ岸壁とその割れ目の美しさからパワースポットとして人気を集め、観光ガイドなどでも紹介されるようになった結果、ごみ投棄や私有地への無断侵入、車両の路上駐車などが増え、地域住民との摩擦を生じて現在は立ち入り禁止となっています。地域の歴史文化を知る資源としての価値を高めるためにも、聖域の意味づけや観光利用にあたっての心得などを正しく伝える取組が必要とされています。



立ち入り禁止となった備瀬のワルミ

I 全体計画

2. 事業の目的

**「名護・やんばる」の玄関口として地域資源を
保全・継承することで観光モチベーションアップをはかります。**

**(1) 「名護・やんばる」の魅力を守り後世に引き継ぎ、情報発信や地域交流を促進する
持続可能な地域づくりをめざします。**

① 地域資源を大切に守り伝えて、観光立県沖縄の文化的財産を創ります。

亜熱帯地域に位置し、国内でも随一の生物多様性と固有の自然をもつ「名護・やんばる」には、多様な自然の中で育まれてきた集落単位の多様な歴史・文化があります。豊かな自然の中で育まれた人々のくらしは、自然と共生するための知恵と工夫にあふれています。そこには、現代の大量消費社会が直面している環境や安全、教育におけるさまざまな問題を考える上での貴重な手がかりが多く秘められていると言えます。

発展するICT技術、高速化・効率化が進むロジスティックス、世界規模で情報が交錯するグローバル化の流れの中で、自然と人が共に生きる「名護・やんばる」の歴史文化や伝統は逆に人々の憧れであり、心のよりどころともなる力を持っています。沖縄のアイデンティティを象徴する資源として価値が高まりつつある「名護・やんばる」は、観光立県沖縄の財産となっていくことが予想されます。

現代社会ひいては未来における人類の資産づくりの重要な事業のひとつとして、これら自然や歴史・文化を記録し、保存・継承し、広く深く伝え継いでいきます。

② 地域資源の価値を高め、多様な産業にも貢献する情報を発信します。

『21世紀に求められる人権尊重と共生の精神を基に、“時代を切り拓き、世界と交流し、ともに支え合う平和で豊かな「美ら島」おきなわ”を創造する。』という基本理念のもと沖縄県により策定された沖縄21世紀ビジョン基本計画においては、「沖縄らしい自然と歴史、伝統、文化を大切にする島」「環境共生型社会の構築」を、めざすべき将来像のひとつとして明確に謳っています。

「名護・やんばる」には、ここに謳われた沖縄らしい自然と歴史、伝統、文化が豊かに存在しており、これらを継承し、調査し、研究し、その成果を広く発信することは、そのまま環境共生型社会の構築を促します。また、学術的なバックグラウンドに基づいた情報発信は、地域ブランドの質を高め、産業全体の価値を高めていくことにもつながります。そして地域資源に立脚した産業は、地産地消により地域経済の循環を促し、足腰の強い経済社会を育てます。

I 全体計画

③ 地域の人々と訪れる人々と共に、持続可能な地域づくりをめざします。

「名護・やんばる」のくらしと自然は地域独特のものであり、先人たちの教えや知恵を継承しながら守ってきた、かけがえのない財産です。これらを観光の側面から見れば、グリーンツーリズムなど体験型、滞在型のレジャーが流行する中、地域の中で守られてきた自然や歴史・文化資源が大きな魅力となり、これまで地域内だけに留まっていたくらしや自然に関わる体験を目的に来訪する観光客も増加しています。

多様性に満ちた生態系や、地域のコミュニティの中で大切にされてきた聖域などは、地域の暮らしと密接に関わりながら価値を保ってきたものですが、その価値の発信方法を誤ると、荒廃を招いたり、価値そのものの低下を招く危険があります。

地域の人々と訪れる人々が共に良い関係を築き、地域資源を持続可能なものとしていくために、総合的かつ有用なガイダンスの提供が必要と考えます。

(2) 新たなガイダンス施設をフィールドミュージアムのコアとして位置づけ、 「名護・やんばる」の地域資源の保存・継承、情報発信、地域交流の要となる拠点とします。

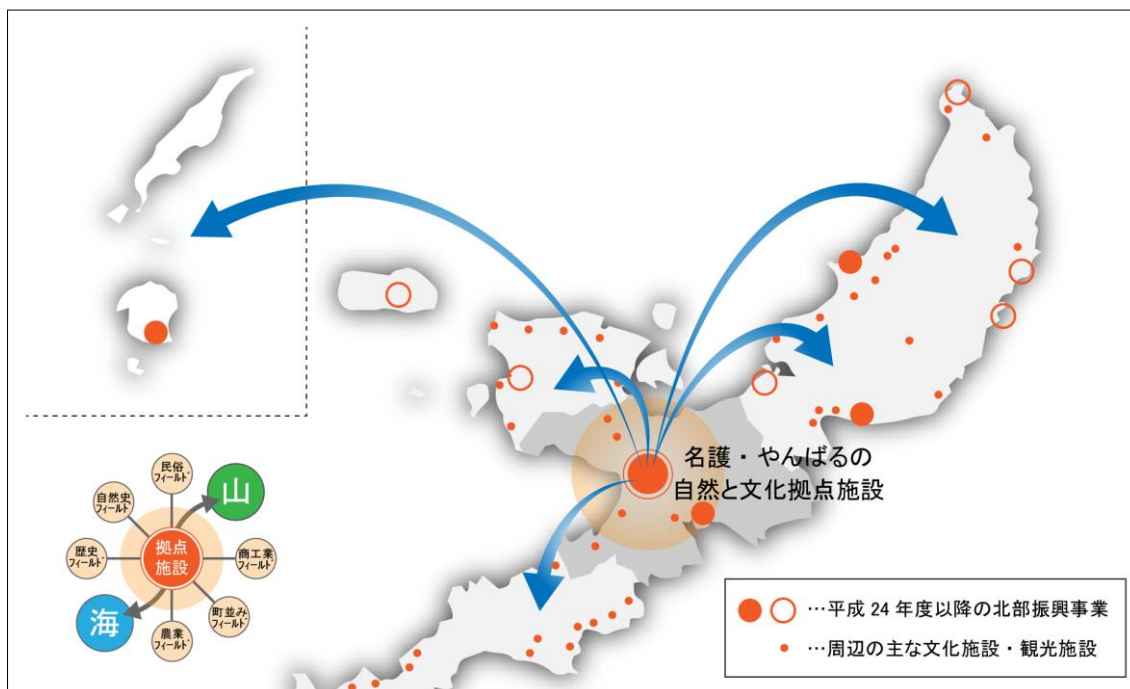
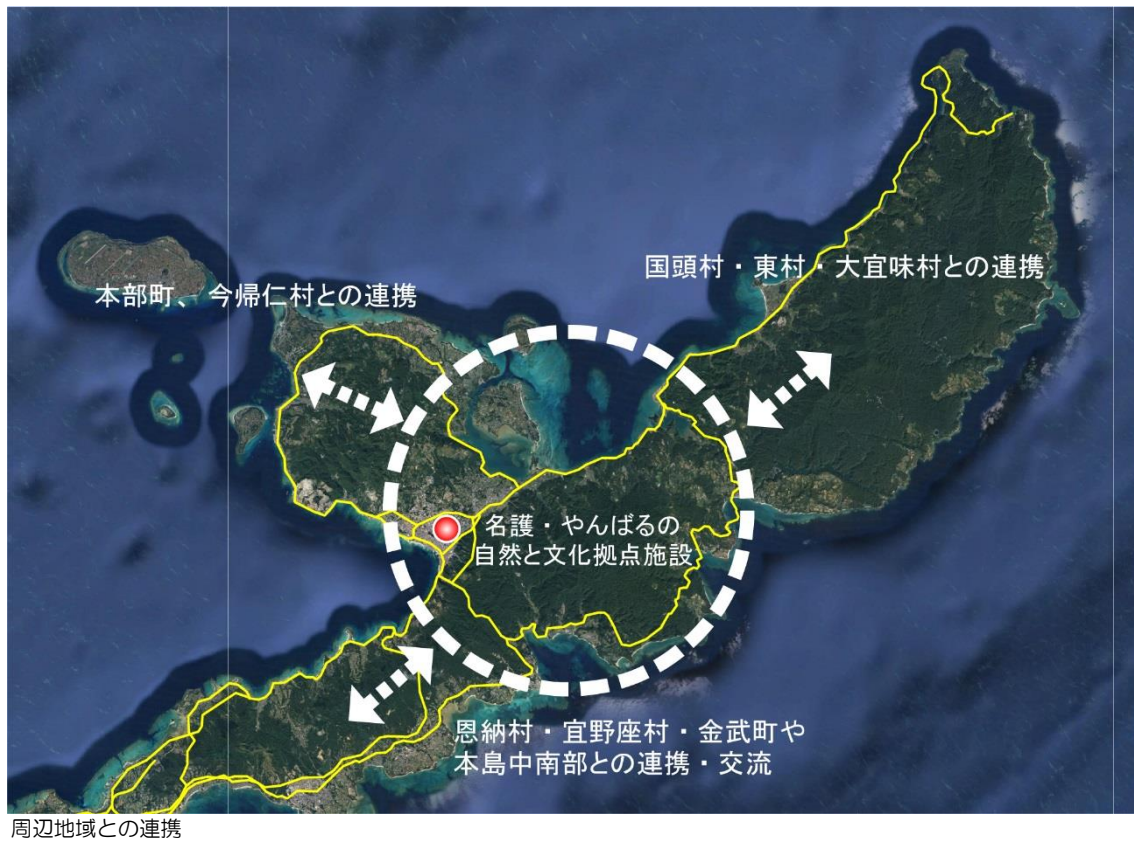
① フィールドミュージアムのコアとしての「名護・やんばるの自然と文化拠点施設」

フィールドミュージアムとは、地域に残る自然や文化を活用しながら保存・継承するため、さまざまな活動拠点をネットワークでつないで、その地域一帯を「屋根のない博物館」として捉える考え方です。「名護・やんばるの自然と文化拠点施設」は、「名護・やんばる」というフィールドミュージアムのコアとして集約された情報を発信し、各地へ誘うガイダンス施設として位置づけられます。ガイダンス内容は、アクセス紹介などのインフォメーション機能から、フィールド内の自然や歴史・文化についての基礎知識紹介、地域資源についての最新情報、自然やくらしの疑似体験提供など多岐にわたります。ガイダンス施設内で完結する内容に加えて、利用者が各々の興味関心にしがいい、必要な情報を多様な角度で得てからフィールドへ出かけられるよう施設内外のつながりを想定することで、利用者の学習効果や観光客の満足度向上を目指します。また、各地の文化施設や機関などの拠点と連携した活動を展開し、相乗的な効果をめざします。

② 既存の名護博物館との関連性

これまでの「名護・やんばる」の地域資源の保存・継承をテーマとした地域博物館として、名護市立博物館の実績が挙げられますが、博物館機能としての保存・継承や地域への教育普及活動に重点が置かれ、観光客への情報発信機能が不十分だった点が挙げられます。また現状の施設では、課題解決のために新たに求められる機能を十分に果たすことができないため、博物館機能と情報発信機能を備えた新たな施設を適切な場所に整備し、活動拠点とします。

I 全体計画



文化施設、観光施設との連携

I 全体計画

3. 基本理念と活動テーマ

(1) 基本理念

「ぶりでい」

「名護・やんばるの自然と文化拠点施設」では、多くの人の協力を得て、持続可能で、かつ観光資源としても魅力ある地域づくりをおこないたいという想いを「ぶりでい（群手）＝みんなの手」という言葉に込め、基本的な理念とします。

(2) 活動テーマ

「名護・やんばるの自然と文化」

活動テーマは、「名護・やんばるの自然と文化」とし、やんばる地域の玄関口であり中核都市でもある名護市を中心にやんばる全体を活動対象として、地域資源の保存・継承や持続可能な利活用、および観光モチベーションアップに資するものとします。

(3) 活動方針

① 地域に根差した文化・情報・交流拠点

展示をはじめとする各種情報発信や様々な体験活動を通して、地域住民、観光客の双方に「名護・やんばる」の地域資源の価値や重要性に裏打ちされた魅力を PR します。地域にひらかれた拠点として、訪れた誰もが豊かな知識に触れ、または体験することを通して、学ぶと同時に他者と情報共有し、教える立場にもなり得る交流の場となることをめざします。さらには、地域や外部組織との連携を深め、これらの活動の相乗効果を高めます。

② あつめ・考え・守り育てる、知の拠点

地域資源を保存・継承し、その価値や魅力を PR するためには、その基盤となる学術的な活動が不可欠です。「名護・やんばるの自然と文化拠点施設」では、フィールド内外の研究機関、教育機関などと連携を図り質の高い情報を収集するほか、地域資源の保存・継承やその利活用を検討するための材料として、地域の協力を得ながら独自にフィールド内の資料情報や原物の収集、調査・研究をおこないます。これらの活動を経て集積された知の財産は地域の誇りとなり、観光をはじめとする様々な産業活性化や、人々の生涯学習などに貢献します。

I 全体計画

4. 計画の位置づけ

本計画は、上位計画の名護市総合計画を指針とする計画として位置づけます。

また、2017（平成 29）年に新たに閣議決定された「観光立国推進基本計画」に即した内容で、沖縄県の「沖縄 21 世紀ビジョン基本計画」に適合し、名護市の他の既存計画とも整合性を持たせた計画とします。

